

クラウドコンピューティング時代の企業情報システム展開

CIO に聞く経営課題

テクニカルアセスメントを実施し システム大改造で次代の展開に臨む

アフラック(アメリカンファミリー生命保険会社)
常務執行役員 日本担当 C I O
福島行男氏



激動の時代である。ほんの近未来の予測すら難しいと言われる。しかし、10年、20年のスパンで見ると、意外や見えて来るものがあるとも言う。企業情報システムの展開についても言えることかもしれない。ところが、日々、劇的に変わるシステム環境変化を追いかけているつもりの展開が、10年、20年のスパンで見ると、逆に何も変わっていないこともあり得る。クラウドコンピューティング時代の到来が告げられ、またもや、システム環境の激変が喧伝されている。「コンピュータが発明されたこと以上の激変が、コンピュータの世界に起こることはない」と言った先人がいたことが思い起こされる。20年前にシステム化最前線にあり、奇しくも今度はCIOとしてシステム全体の運営をまかされたAFLACの福島行男氏に、今後のシステム運営の要諦を聞いた。(編集部)

システム大改造

本誌 ただ今、CIOとして経営課題だとお考えのものは？

福島 私がIT部門担当役員として着任致したのは、2006年1月のことです。実は、それ以前にシステム部門の一員として在席しておりました経歴もございます。その当時(20年ほど前)と比較してみますと、基本的なところで「変わっていないな」という実感がありました。

確かにアプリケーションの数、システムやデータの規模は大きくなってはいますが、テクノロジー的、インフラストラクチャ的に多くの部分で変わっていませんでした。特に、システム開発のあり方、データベースのデザインなど、内容的に基本的な変化はみられませんでした。

20年以上前に開発されたシステムがよく動いているなあと一方で感心した

から驚くと同時に、大きな課題だなという直感的実感がありました。

と言いますのも保険会社としての基幹業務である契約管理系システムを日立製メインフレーム上で処理し、最も重要な顧客/契約管理データベースを ADABAS という DBMS で管理するというシステム構成で 20 年前から稼働させてきましたが、果たしてこのままいいのだろうかと感じた次第です。

また、情報系/営業系システムにつきましては、IBM マシン上で運営していきまして、データベースは DB2 で管理されてきています。

私が着任した 2006 年 10 月に、基幹系システムのプラットフォームを日立から IBM マシンにリプレースする作業が行われました。

そんなこともあって、システム全体を見直す良い機会となったのですが、そのひとつとして、データベースに関する問題も大きな課題として提起されました。

見直しにも様々なポイントがあると思います。例えば、本来、データベースというものは、様々なデータを、様々な切り口から活用していくべきものです。

ハードウェアプラットフォームが IBM マシンに統一化されたように、データベースの管理も異なる DBMS ではなく、統一化された方がいいのではないかなど検討されてきました。

そうした意味も含めて、思い切ってデータベースの改造/再編にも着手するチャンスではないかと考え、現在、その作業を進めているところです。

ADABAS から DB2 へ

本誌 ADABAS から DB2 への移行をされていると伺いましたが。

福島 その通りです。

昨今の DBMS はリレーショナル型のものが主流になっています。新規のアプリケーション開発でも、リレーショナル型データベースからデータ活用をするという考え方が採用されています。

ADABAS は完全なリレーショナル型でないということも含めて、またアーキテクチャの観点からも、システム開発から運営段階まで含めたソフトウェアプラットフォーム資産全体の有効活用を図るため見直していくことにしました。

確かに、ADABAS には省資源で小回りの利くデータベース運用ができる点など悪いものではないですが、情報の活用という観点、他のシステムリソースとの整合性などを配慮すると、見直しの時期にきていると判断しました。

2007 年になりますと、一挙に社内の各部門から新規のアプリケーションも含めて様々な開発依頼が殺到してきました。

しかも、一個の新商品開発対応にしても、行政への対応措置にしても、従来とは比較にならないアプリケーション工数が必要なが判明しましたし、その背景にはデータベースのハンドリングの問題もあることが認識されました。

もちろん、無尽蔵な資金と時間と労力をかければできないことはないとしても、私が一番恐れたのは、ビジネス市場への対応能力でした。市場ニーズに対して商品化するのが半年遅れの 1 年掛かりであるとか、競合他社が 1000 人月で対応しているのに我社は 2000 人月のコストも時間も労力も必要だというの

では、市場競争に勝てません。

本誌 まさに CIO としての経営課題だったということですね。

福島 その通りです。

IT の視点から言うと、陳腐化したトラディショナルなシステムを先進的なテクノロジーに移行することで、環境変化に追随というより先取りができる情報武装をしていく体制を確保しておきたいと考えた次第です。

そういう状況を総合的に判断しまして、データベース周辺を含めたシステム大改造を進めています。

もう少し卑近なレベルで言いますと、IT コストが掛かりすぎだということも、私が懸念している問題です。

また、Web/インターネットテクノロジーを駆使した、営業活動支援系のもっとアグレッシブなシステム展開をしていくことも目指したいと考えています。

その場合、自社が活用できる IT テクノロジーがボトルネックになるような状態は絶対に避けなくてはなりません。

CIO の方の中には、最近の第一の経営課題はコストリダクションだという方もおられますが、私はコストリダクションではなく、投資をしてもそれに見合ったリターンのない投資が問題だと認識すべきだと思っています。

いずれにしても、これからの事業展開には IT システムが勝負の決め手になると思いますので、そのためにも、システムイノベーションが可能な IT テクノロジーインフラの整備が喫緊の課題だと捉えています。

脱 ADABAS を決めた背景

本誌 ADABAS を DB2 に移行するという作業は、大改造を目指したインフラ整備の作業の中でも象徴的なことだと思いますが、その背景、狙いは？

福島 べき論から言いますと、DBMS だけを替えただけでは本来の目的は果たせないと思っています。やはり、データベースとアプリケーションとが相俟ったデザイン変更をして、システム全体のモダナイズをする、再編をするという作業が必要だと思っています。

今回、ADABAS から DB2 への移行に踏み切った根元には、提供ベンダーであるソフトウェアエージ社の日本での窓口会社が替わったという背景、事情もあります。

それらを総合的に判断しますと、ADABAS を使い続けることによる技術的リスクを感じたこと、およびテクニカルサポートを受け入れ難い事情が出てきたということがあります。

実は、私どもでは全社的な情報システム運用を大規模にアウトソーシングする計画を持っており、この基本方針を明らかにしてまいりました。その場合、これまで以上の ADABAS ライセンス費用の支払を要求される可能性があることが判ったのです。

本誌 どれくらいのライセンス費用になるのですか。

福島 これまでの数倍の費用になるように聞いています。

そうした事情も、前述しましたような既存システムの大幅な見直しの要因の

ひとつになっています。

すでにデータベースの移行作業を進めておりまして、このほど第一陣としてのアプリケーション移行が、脱 ADABAS の形で実現されたところです。

本誌 ライセンス費用についてベンダーと話し合う余地はないのでしょうか。

福島 これまでの契約条項、使用条件につきまして法廷闘争も視野に入れた覚悟で臨むことも検討されましたが、最終的に私どもにとって前向きな成果が期待できないと判断しました。

それよりも、旧来のシステムを脱皮し、より可能性の高い新たなシステム環境作りを目指した大改造をする方が、全社的なシステムリスクを回避する方向だと判断致しました。

本誌 金持ち喧嘩せず、という言い方がありますが、そういうご判断ですね（笑）。

福島 （笑）そうですね、これ以上は関わりたくないというのが正直なところですね。

システム大改革の成果

本誌 最終的に全アプリケーションが脱 ADABAS の形になるのはいつ頃の予定ですか。

福島 2010年9月までに終了する予定です。ちなみに、2009年6月に Wave 1 ということでパイロット的に7つのデータベースをカットオーバーしましたが、移行再編作業は順調に推移しているところです。

7つのアプリケーションは、内容的には顧客情報管理関連ということで情報系システムですが、引き続いて約260の契約管理系基幹システムの移行が一気に進められていくことになっています。

本誌 ADABAS から DB2 への移行を試みた他のユーザー企業では結構苦戦しているのですが、順調に進んでいる要因は何ですか。

福島 ADABAS を使っているアプリケーションシステムはプログラム本数で言いますと何万本というオーダーで、約200万ステップに及ぶ規模のものとなっていますが、すべて ADABAS データベースとは独立した存在として設計開発してきています。

したがって、データベース部分を移行するだけで、アプリケーションプログラムそのものは、ほとんど手をつける必要がない構造になっています。

それが、比較的作業がスムーズに進展している理由だと思います。

本誌 NATURAL は使っていないのですか。

福島 必要な NATURAL プログラムは COBOL プログラムに全部コンバージョンしております。

そもそも NATURAL の使用範囲は、IT 部門がテストデータ作成に使うとか、リサーチ系ジョブのレポート作成に使うとか、エンドユーザーコンピューティング向け言語として使うなど、かなり限定されてきていましたので、棚卸しをして、絶対不可欠なもの以外は不要という判断で対処してきています。そこまで割り切らないと、既存システムの大改造はできないと思います。

むしろ、NATURAL という EUC 言語を安易に渡してしまうことで、今日企業として最重要課題となっている個人情報へのアクセスが自由自在になっているなど不適切な取扱いも、後述します棚卸しによって発見されています。

企業全体のリスクマネジメント、IT システムガバナンスの観点からも、不適切なものとして仕分けし、廃棄処分できましたのも、今回のシステム大改造プロジェクトの成果だと言えらると思っています。

私は決して EUC を否定するわけではありません。ただ、何でも自由にデータベースにアクセスできてしまうというシステム環境は改められるべきだと思います。

ある種のデータにアクセスしたいというのであれば、データウェアハウス / データマートなど、個人情報保護など必要な配慮がされた照会専用データベースを活用するようにすべきだと思います。

問われるガバナンス能力

本誌 非常にしっかりとしたデータ管理者が貴社にはいるということですね。

福島 DBA という職制を持った専門家がいて、データベースの野放図な使い方は許さない、必要なアクセスコントロールをするという姿勢で臨んで来ています。

ただ、そうしてきたにもかかわらず、NATURAL を使った EUC では、いくつか問題のあるデータベースアクセスの存在が棚卸しで明らかになっています。

今回の大改造ではこうした問題も解決されつつありますし、セキュリティ上の観点からも、より強固な IT システムガバナンスが、トップダウンの指示で実現される方向で動いています。

本誌 CIO としての責任と権限が発揮されているということですね。

福島 そうです。

特にクラウドコンピューティングが喧伝されていますが、ますますアウトソーシングサービスを活用する機会が増えてくることを想定しますと、IT リソースのガバナンスという問題が重要視されてくるものと考えております。

ちなみに、ASP、SaaS、そしてクラウドコンピューティングサービスなど、いずれにしても情報システム部門から見えないところでエンドユーザー部門が使えるサービスが増えてきています。

これらを野放図に使ってしまうと、全社的な情報セキュリティコントロール能力が失われてしまう危険性があります。

そういう観点から、今回のシステム再編成にあたって、システム全体の棚卸しということでテクニカルアセスメントを実施しました。

本誌 実際、問題のあるものが発見されたわけですね。

福島 情報漏洩のリスクが高いものも含まれていましたので、そうした内容につきましては、社内システム部門が開発し、社内サービスとして引き取っています。

これから展開されるクラウドコンピューティングサービスがどういうものであるにせよ、私ども企業としての立ち位置を明確にし、企業としての存続を確

保することを第一義とした上で、各種のサービス活用ができる時代を迎えたいと考えております。

これらをどう使い切るかは、プロジェクトマネジャーの人間力にかかってくると考えています。

本誌 ありがとうございました。（文責：在記者）